

H O 1 - 0 1

調査研究 中間報告 第471号

幼児教育と小学校教育における架け橋プログラムに関する研究

令和8年3月  
千葉県総合教育センター

# 幼児教育と小学校教育における架け橋プログラムに関する研究

千葉県総合教育センター

カリキュラム開発部研究開発班

## 1 主題設定の理由

### (1) 国の動向と県の施策

「第4期教育振興基本計画」（令和5年6月16日閣議決定）では、目標1に「確かな学力の育成」が掲げられ、その基本施策として「幼児教育の質の向上」が明記されている。また、「第4期千葉県教育振興基本計画」（令和7年3月）においても、基本目標「未来を切り開く『人』の育成」の下、施策7「人格形成の基礎を培う幼児教育の充実」の中で「小学校教育との接続の円滑化」が挙げられており、幼児教育と小学校教育が連携したカリキュラムの開発・実施が求められている。（図1）

学習指導要領解説総則編においても、幼児児童生徒に対する一貫性のある教育の実現が求められており、各幼児教育施設の教育要領・指針等に基づき、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を共有し、円滑な接続を図ることが重要視されている。（図2）

### (2) 本県における現状と課題

本県では平成31年3月に「5歳児の学びのカリキュラム／スタートカリキュラム（千葉県モデルプラン）」を発行している。令和8年1月20日現在、同資料へのWebアクセス数は10,551件に達しており、学校現場や幼児教育施設における接続期カリキュラムへのニーズは依然として高い。（図3）

しかし、令和7年3月に県学習指導課が実施した「幼児教育に係る調査」（県内54市町村回答）の結果を見ると、接続の状況について「連携の予定・計画がまだない（ステップ0）」や「連携・接続に着手したいが、まだ検討中である（ステップ1）」「授業等の交流はあるが、教育課程の編成は行われていない（ステップ2）」

**1 主題設定の理由**

**第4期教育振興基本計画**（令和5年6月16日閣議決定）

**目標1** 確かな学力の育成 幅広い知識と教養・専門的能力・職業実践力の育成  
【基本施策】 幼児教育の質の向上

**第4期千葉県教育振興基本計画**（令和7年3月 千葉県教育委員会）

【基本目標】 未来を切り開く「人」の育成  
施策7 人格形成の基礎を培う幼児教育の充実  
(2) 小学校教育との接続の円滑化

幼児教育と小学校教育の接続の改善 ⇒ 連携したカリキュラムの開発・実施

図1 研究発表会スライド資料より

**1 主題設定の理由**

**学習指導要領との関わり**  
学習指導要領解説総則編  
幼児児童生徒に対する一貫性のある教育の実現

学びの連続性  
一貫性のある教育

**各幼児教育施設の教育要領・各指針**

求められている内容	幼稚園教育要領	保育所保育指針	幼児認定型こども園教育・保育要領
1 小学校以降の基礎形成	(乳児期・幼児期にふさわしい生活を通して) 創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培う		
2 接続の円滑化	(小学校との連携を図り) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有し、 小学校教育と円滑な接続を図るものとする。		

図2 研究発表会スライド資料より

**1 主題設定の理由**

接続期のカリキュラム  
千葉県モデルプラン  
平成31年3月発行

幼児教育や幼保小接続への高いニーズ

○ **アクセス=10,551件**  
(令和8年1月20日現在)

幼保小接続に関する調査（後述）の記述にも接続に向けた記述は多数。しかし、各市町村の接続への取組状況は…

図3 研究発表会スライド資料より

**1 主題設定の理由**

幼児教育に係る調査より（R7.3月実施）

市町村全体の接続・連携状況	市町村数 (54市町村)
ステップ0 連携の予定・計画がまだない。	1
ステップ1 連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。	16
ステップ2 年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。	28
ステップ3 授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。	5
ステップ4 接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。	4

県内の80%以上の市町村が交流に留まり、思うように連携・接続が進んでいない。

図4 研究発表会スライド資料より

等の回答が8割以上を占めている。多くの市町村が「交流」の段階に留まり、「接続を見通した教育課程の編成・実施」という質の高い連携には至っていないのが現状である（図4）

これらのことから、現場が現状の「交流」から一步踏み出し、接続を深めるための「最初の一歩」を支援する必要があると考え、本主題を設定した。

## 2 研究の目的

アンケート調査や視察等を通じて幼児教育と小学校教育の接続期（架け橋期）における課題やつまずきの要因を分析し、その解決に向けた具体的な手法やツールを提案・検証することを目的とする。これにより、幼児教育の「遊び」と小学校教育の「学び」を滑らかにつなぎ、子供たちの主体的な学びを支える環境づくりに寄与することを目指す。

## 3 研究計画

令和7年度	令和8年度
<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究計画立案</li> <li>○研究会議（有識者指導）</li> <li>○アンケート調査の実施</li> <li>○先進校への視察 （調査研究協力園・協力校）</li> <li>○調査研究結果報告 （センター研究発表会等）</li> <li>○次年度調査研究計画立案</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研究会議（有識者指導）</li> <li>○実践事例等収集</li> <li>○調査研究成果物作成（Webアップ）</li> <li>○調査研究結果報告 （センター研究発表会等）</li> <li>○研修づくり（研修コンテンツ作成）</li> <li>○広報資料作成（リーフレット等）</li> </ul>

## 4 研究概要

### (1) 令和7年度

（調査研究1年目：基礎研究・実態把握）

調査研究協力市町村（佐倉市）との連携、アンケート調査の実施・分析、文献調査（国や県の施策・先行研究等）を行い、架け橋期における課題を明らかにし、研究の方向性を定める。（図5）

### (2) 令和8年度

（調査研究2年目：実践研究・開発）

架け橋期についての課題解決に向けた手法やツールの提案及び検証を行う。佐倉市の「架け橋カリキュラム」実践校への視察や他市町村の事例収集を行い、最終的に現場で活用できる「成果物」および研修コンテンツを作成する。（図6）

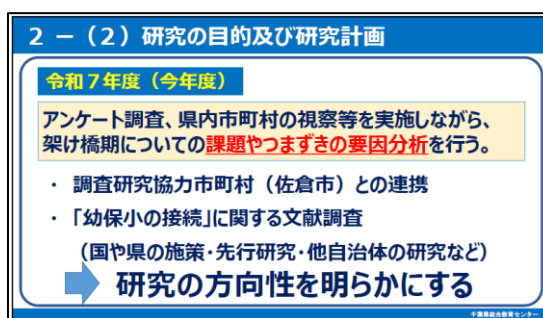


図5 研究発表会スライド資料より

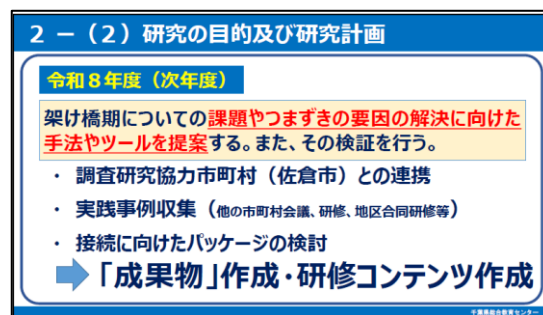


図6 研究発表会スライド資料より


## 5 研究組織

- (1) 共同研究者（研究会議講師）  
久留島 太郎（植草学園大学 発達教育学部 教授）
- (2) 研究協力機関  
佐倉市教育委員会、佐倉市内の全幼児教育施設（公立・私立、計 46 園）  
佐倉市立小学校（全 23 校）
- (3) 所内連携  
幼児教育アドバイザー（7名）、カリキュラム開発部研究開発班

## 6 今年度の取組

- (1) 調査協力市町村との連携  
佐倉市が推進する「幼保小架け橋プログラム推進事業」と連携し、以下の活動を行った。（図 7）

### 3 - (2) 調査協力市町村との連携



今年度の実施内容	
5月	第1回検討会
6月	事務局とのオンライン会議 架け橋カリキュラムに係る会議
8月 ～9月	アンケート調査の実施・分析
1月	幼保小合同研修会

**佐倉市幼保小架け橋プログラム推進事業 推進の2つの柱**

① 架け橋期にふさわしい学びを「見える化」すること  
→「架け橋カリキュラム」作成マニュアルの作成及び活用

② 佐倉市の実情にあった垣根のない枠組みの構築  
→研修・連携体制の構築

図7 研究発表会スライド資料より

- (2) 幼保小接続に関する実態調査

### ア 調査の概要

幼保小の交流や連携状況、架け橋期についての実態調査から幼児教育と小学校教育の連携における実態や課題を把握し、学校現場に有用な調査研究資料や研修づくりに活用するため、実態調査を行った。

その概要については表1のとおりである。

表1 調査概要について

- ・ 質問紙調査（Web アンケート）  
「幼児教育と小学校教育における架け橋プログラム」に係る調査  
【目的】 幼保小の交流や連携状況、架け橋期についての実態調査から幼児教育と小学校教育の連携における実態や課題を把握し、学校現場に有用な調査研究や研修づくりに活用する。
- 【対象】 幼児教育施設（市内 46 園） → 園長・5歳児クラス担当 等  
小学校（市内 23 校） → ① 管理職、1年生学年主任 等  
② 1年生学年主任以外の  
学年主任 等
- 【内容】 ・ 接続についての意識・理解の様子  
・ スタート（アプローチ）カリキュラムの実施の有無  
・ 交流活動（職員同士・子供同士）の実施状況  
・ 双方の教育に関するイメージ

などを中心に 25 問程度の質問

【方法】 Web アンケート（「ちば電子申請サービス」を利用）

【期間】 令和 7 年 8 月 25 日 ～ 9 月 5 日まで

【回答者】 160 名

## イ 調査の結果と考察

### (ア) 用語の理解と意識の差

「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」の認知度については、幼児教育施設で 100%、小学校の管理職・1 年担任で 91%と高い数値を示した。しかし、1 年担任以外の小学校教員では 54%（全体）、特に 1 年担任経験がない教員では 39%に留まり、校内における理解度に大きな開きがあることが分かった。（図 8）

また、「架け橋プログラム」という用語の認知度についても、幼児教育施設（100%）や小学校管理職・1 年担任（88%）に対し、小学校全体では 51%、1 年担任以外では 35%と低く、連携に不可欠な「共通言語」が十分に浸透していない現状が浮き彫りとなった。（図 9）

### (イ) 交流活動の実態

年間を通じた交流活動の実施回数は、子供同士の交流について幼児教育施設の 40%、小学校の 52%が「0 回」と回答しており、「1 回」を含めると大半を占める結果となった。

現状の連携について「不十分」と感じている割合は、幼保小ともに 75%を超えており、現場の教職員は現状に満足しておらず、接続を深めたいという課題意識を持っていることがうかがえる。（図 10）

### (ウ) 相互のイメージと期待

自由記述から、幼児教育施設側は小学校に対し、「画一的」「時間が無い」「怖い」といったイメージを持ち、小学校側は幼児教育施設に対し「自由すぎる」「遊び中心」といったイメージを持っていることが明らかになり、双方の認識にギャップ（ずれ）が存在することが確認された。

一方で、双方ともに「子供たちのスムーズな移行」や「成長」を願う共

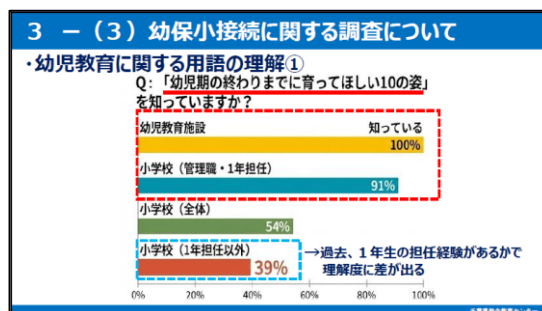


図 8 研究発表会スライド資料より

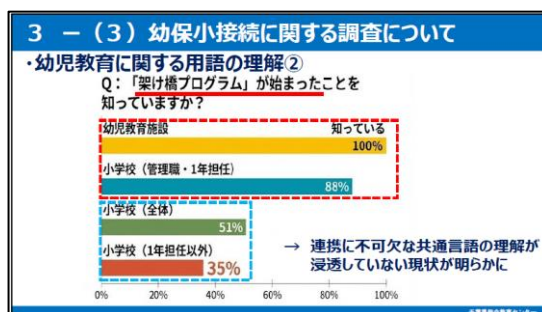


図 9 研究発表会スライド資料より

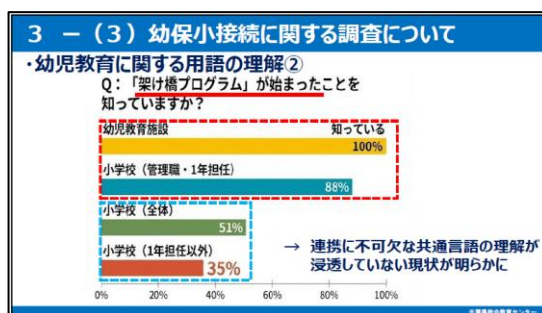


図 10 研究発表会スライド資料より

通した期待を持っており、「小1ギャップの解消」や「教職員間の相互理解」を求める声が多数寄せられた。(図 11)

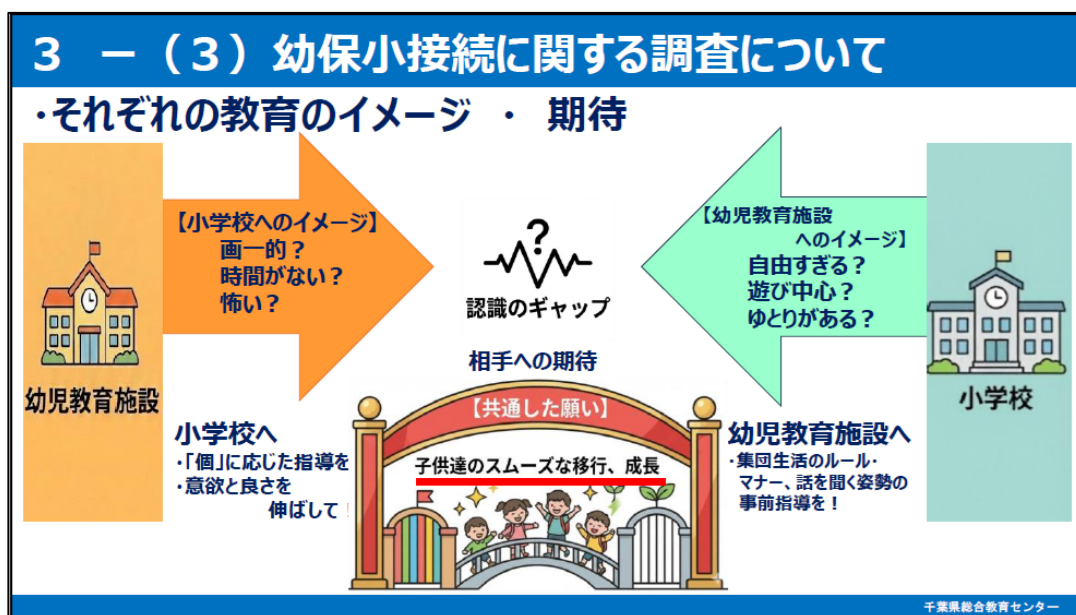


図 11 研究発表会スライド資料より

(エ) 接続を願う声

(自由記述欄から)

小1ギャップの解消や、子供の負担感や不安の軽減等の子供への心情への寄り添う内容、何より教職員間の相互理解と連携の強化を期待する声が多数寄せられた。

(図 12)



図 12 研究発表会スライド資料より

(オ) 接続を阻む要因(3つの壁)

接続が進まない背景として、以下の「3つの壁」が明らかになった。

(図 13)

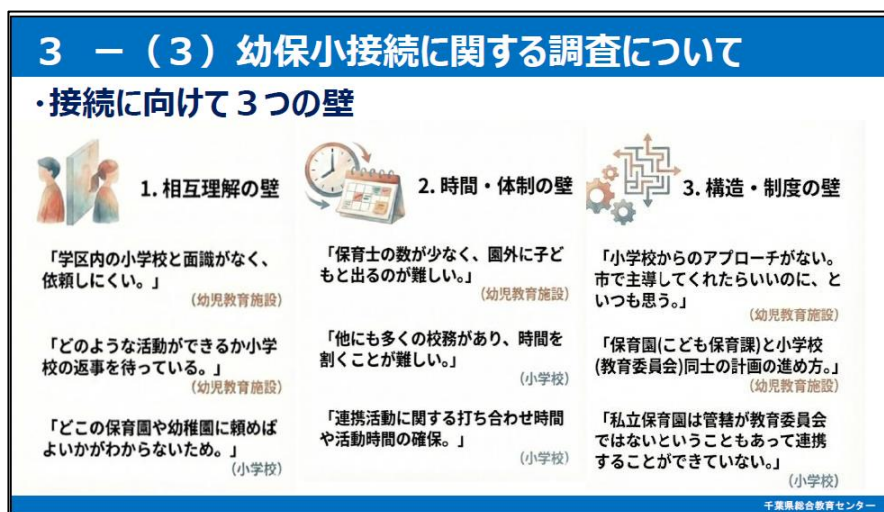


図 13 研究発表会スライド資料より

①相互理解の壁

「学区内の小学校と面識がなく依頼しにくい」「誰に連絡すればよいか分からない」といった心理的・物理的な距離。

②時間・体制の壁

「日常業務に忙殺され時間を割けない」「保育士数が少なく園外に出にくい」といった物理的な制約。

③構造・制度の壁

「管轄が異なる（教育委員会と保育課など）ため連携しづらい」といった制度上の課題。

これらの壁により、「相互理解不足」から「連携へのためらい」が生じ、交流機会が失われ、さらに関係性が希薄化するという「負のサイクル」が生じている。(図 14)

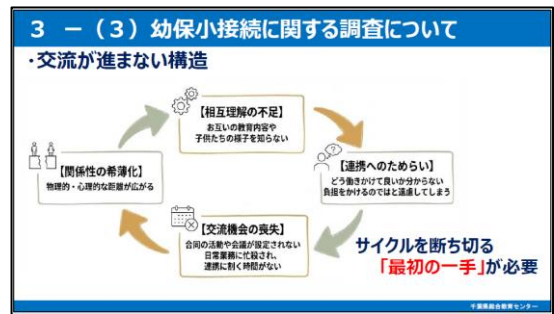


図 14 研究発表会スライド資料より

(4) 接続に向けたステップの提案

実態調査の結果を基に、この負のサイクルを断ち切るため、接続に向けた段階を以下の4段階（ホップ・ステップ・ジャンプ・リンク）に整理した。

特に各段階における具体的なアクションを提示することで、各現場が現在地を知り、無理なく「最初の一歩」を踏み出せるようにすることを目指している。(図 15)

3 - (3) 幼保小接続に関する調査について			
・実態調査の結果から見える接続に向けてのステップ			
段階	目標	アンケートの記述から	具体的なアクション
<b>リンク 定着</b> 【目標のすり合わせ (線への準備)】	目指す子ども像の共有をする	・特定の担当者頼みになっている ・幼児教育施設と小学校で考え方にずれがあると思う	・目指す子ども像の共有 ・単発交流の振り返り ・次年度に向けての連携の情報交換
<b>ジャンプ 試行・協働</b> 【特定の活動(点)の交流】	単発で何か交流を行ってみる	・カリキュラム作成の時間が取れない ・具体的な活動方法や実施回数などが分からない	・単発イベントの実施、交流 ・長期休みを利用した合同研修会 ・教職員同士の意見交換会
<b>ステップ 相互理解</b> 【お互いの教育の理解】	互いの「違い」と『共通点』を知る	・互いの生活リズムを知らない ・いきなり交流はハードルが高い ・お互いにどんなことを大切にしているか分からない	・行事日程、日課表、時間割の共有 ・相互参観 ・特定のテーマでの意見交換(給食の時間、座る姿勢など...) ・間接的交流(負担のないものから)
<b>ホップ 基盤づくり</b> 【顔の見える関係構築】	相手を知り、窓口を作る	・面識がなく依頼しにくい ・どこに連絡すればいいかわからない ・施設同士が離れているから連携できない	・連携窓口(担当者)設定 ・互いの学校だよりの交換 ・場所の共有 ・間接的な交流(Zoom、作品等)

図 15 研究発表会スライド資料より

ア ホップ…（基盤づくり【顔の見える関係構築】）

「面識がなく依頼しにくい」「どこに連絡すればよいか分からない」といった「相互理解の壁」を乗り越えるための最初の段階である。

【目標】 相手を知り、連絡の窓口を作ること。物理的・心理的な距離を縮めること。

【具体的なアクション】

- ・ 連携窓口（担当者）の設定と共有
- ・ 互いの「学校だより」や「園だより」の交換
- ・ 行事日程、日課表、時間割の共有
- ・ 間接的な交流（Zoom等のICT活用、作品の交換・掲示など、移動を伴わない負担の少ないもの）

イ ステップ…相互理解【お互いの教育の理解】

「互いの生活リズムを知らない」「いきなり子供同士の交流はハードルが高い」といった課題に対し、教職員間の理解を深める段階である。

【目標】 互いの教育や生活の「違い」と「共通点」を知ること。

【具体的なアクション】

- ・ 相互参観（授業や保育の様子を見学し合う）
- ・ 特定のテーマ（「給食の時間の過ごし方」「座る姿勢」「話を聞く姿勢」など）に絞った意見交換会の実施
- ・ 幼児期の「遊び」と小学校の「学び」のつながりについての協議

ウ ジャンプ…試行・協働【特定の活動（点）の交流】

「具体的な活動方法が分からない」「特定の担当者頼みになっている」といった課題を解消し、単発であっても実際に交流を行ってみる段階である。

【目標】 単発での交流活動を実施し、次につなげること（点の交流）。

【具体的なアクション】

- ・ 単発イベント（季節の行事、学校探検など）の実施と子供同士の交流
- ・ 長期休業期間を利用した幼保小合同研修会の開催
- ・ 実施した単発交流の振り返りと、次年度に向けた情報交換
- ・ 教職員同士の意見交換会（事例検討など）

エ リンク…定着【目標のすり合わせ（線への準備）】

「幼児教育施設と小学校で考え方にずれがある」といった深い課題に向き合い、接続を見通したカリキュラム作成（架け橋カリキュラム）へとつなげる段階である。

【目標】 目指す子供像（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等）を共有し、教育課程の接続を図ること。

- 【具体的なアクション】
- ・「目指す子供像」の共有とすり合わせ
  - ・接続期カリキュラム（スタートカリキュラム、アプローチカリキュラム）の共同作成
  - ・検討
  - ・年間を通じた計画的な交流活動の実施

## 7 成果と課題

### (1) 成果

今年度の調査研究における最大の成果は、これまで漠然と「連携不足」と言われていた幼保小接続の現状を、数値データや現場の生の声として可視化できた点にある。

具体的には、多くの市町村が「交流」の段階に留まっている実態や、接続を阻む要因として「相互理解」「時間・体制」「構造・制度」という「3つの壁」が存在することを明らかにした。これらの阻害要因によって、現場が「負のサイクル」に陥っている構造を解明できたことは、解決策を見出すための重要な基礎資料となる。

また、これらの客観的なデータを基に、接続に向けた具体的なステップ（ホップ～リンク）を検討し、各段階に応じたアクションプランを提示できたことは、次年度の実践研究につながる大きな成果である。

### (2) 課題

次年度に向けた課題として、以下の2点が挙げられる。

1つ目は、本研究で得られた知見の普遍性の検証である。今回の調査結果や提案したステップは、特定の一市町村のデータに基づいているため、「一部の地域だけの話ではないか」という懸念が残る。全県的なレベルで展開しても整合性が取れる内容なのか、他市町村の状況とも照らし合わせながら精査していく必要がある。

2つ目は、現場のニーズに応える具体的なツールの開発である。現状の分析やステップの提示だけでは、「結局何をすればいいのか？」という現場の問いに十分に答えられない可能性がある。接続のための具体的な手法やツールを「パッケージ」として整備し、多忙な現場の教職員がすぐに活用できる形まで検討を深め、還元していくことが求められる。

### (3) 今後の方向性

上記の課題を踏まえ、次年度は引き続き調査協力市町村との連携を強化し、「架け橋カリキュラム」作成の実践校への視察や会議への参加を通じて、ステップ表のブラッシュアップを図る。また、研修会や交流会等の好事例を収集するとともに、実態把握アンケートを追加実施することで、研究の客観性を高める。

**5 今後の方向性**

**調査協力市町村との連携**

- ・ 開発会議への参加、助言
- ・ 架け橋カリキュラム実践校への視察
- ・ ステップ表のブラッシュアップ
- ・ 研修会、交流会等の実践事例収集
- ・ 実態把握アンケートの追加実施

↓

**接続に向けてのパッケージの提案（リーフレット）**

図 16 研究発表会スライド資料より

最終的には、実態把握から接続までの一連の流れを分かりやすく示したリーフレットを作成し、アンケートのひな形などを含めた「接続に向けてのパッケージ」を提案する。幼児教育施設、小学校、行政担当者の誰もが活用でき、無理なく接続の第一歩を踏み出せるような支援ツールとして、成果物を完成させる予定である。(図 16)

## 8 参考文献

### 参考文献一覧

#### 文部科学省・中央教育審議会

- 📄 『幼児小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初稿）』（2022）
- 📄 『令和の日本型学校教育の構築を目指して（答申）』（中央教育審議会、令和3年1月）
- 📄 『幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 書稿のまとめ』（中央教育審議会、令和5年2月）
- 📄 『令和5年度幼児教育実証議会』（2024）
- 📄 『指導と評価に生かす記録』（令和3年10月）
- 📄 『幼児期の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開』（令和3年2月）
- 📄 『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）』（中央教育審議会、2016）
- 📄 『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム スタートカリキュラム導入・実践の手引き』（国立教育政策研究所）
- 🌐 Webサイト「幼児小の架け橋プログラム」
- 📺 動画シリーズ「やってみたいが学びの芽」
- 📺 動画シリーズ「幼児期の大切な学びが分かる動画シリーズ」

#### 大学・研究機関

- 📄 『幼児小の架け橋プログラムのモデル池塚における成果に係る調査研究【結果の概要の報告】』（東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター(CEDEP)、令和6年度）
- 📄 吉永 安里（国学院大学）『「好き」を青み、「根意」を伸ばす小学校の架け橋プログラムを考える』（事例発表資料）
- 📄 古賀 松香（京都教育大学）幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について 何をつなげるためにどうするのか（事例発表資料）
- 📄 岸野 麻衣（福井大学）幼児教育がどのように学びの基礎となるのか／幼児一人一人の資質・能力の育成を図る幼保小接続（令和7年度幼児教育専門研修資料）
- 📄 横山 真貴子（文部科学省）幼保小の架け橋プログラムを園や地域でどのように展開していくか（令和7年度幼児教育専門研修資料）

#### 書籍

- 📄 『幼児教育と小学校教育がつながるってどうゆうこと？』 東洋館出版社 文部科学省 著
- 📄 『幼児小の「架け橋プログラム」実践のためのガイド』 ミネルヴァ書房 湯川秀樹、山下文一 監修

【研究担当所員】

千葉県総合教育センター カリキュラム開発部

部 長	佐々木浩幸
研究開発班 研究指導主事	清水 健広
研究指導主事	稗田 隆二
研究指導主事	齊藤 典子
研究指導主事	藤岡 夏基 (主担当)
幼児教育アドバイザー	市原 純子

調査研究 中間報告 第471号

---

令和8年3月23日

発行責任者 千葉県総合教育センター  
所長 酒井 誠一

発 行 所 千葉県総合教育センター

〒261-0014 千葉市美浜区若葉2丁目13番

TEL 043 (276) 1166  
FAX 043 (272) 5128

---

---